別紙1

論文の内容の要旨

論文題名　自然保護運動における環境認識

氏名　　杉谷　隆

本論文にいう環境認識とは，「自然をどう評価するか；どうあるべきと思うか」という価値観を指す。これは，主体の立場によって異なりうるし，思潮として時代的にも変化するものである。本論文は，高度経済成長期以降の現代日本において，市民による自然保護運動の背景となった環境認識を，以下の４つの事例を通して検討した。

１）福井県大野盆地の地下水保全運動（1970 年代～）
２）千葉県三芳村の旧農用林の保存運動（1988 年～）
３）渡良瀬遊水池のアシ原の保全運動（1988 年～）
４）香川県庁が主催する旧農用林の保全運動（1994 年～）

これらの運動の保護対象は，隔絶地域の原生林のような原生自然ではなく，人手が加わった自然物である。研究手法としては，現地における地形・植生などの現況調査，運動家や一般市民への聞き取り，参与観察，質問票調査，および文献資料調査を行った。

大野盆地では，高度経済成長末期の 1960 年代末から，市街地の家庭浅井戸が枯渇しはじめた。大野市は，繊維工場での節水を要請し一般家庭での地下水融雪を禁止したが，効果は上がらなかった。市民運動家らは地下水保全を主張したが，普遍的な共感は得られなかった。市街地住民は，運動家らも含めて，地下水位が低下すれば

より深部の地下水を求めて井戸掘り競争を続けた。地下水は，自然環境というよりも自然資源と認識され，争奪の対象となった。

三芳村では，バブル景気下の 1988 年にゴルフ場開発計画が持ち上がり，それ以前の 1973 年から活動を続けていた有機農業・産直運動団体によって，建設反対運動が起こされた。この運動は，立木トラストの手法を採用することで全国から支援を受け，建設計画は 1994 年に中止された。この運動家や立木購入者には，第二次世界大戦時から戦後のベビーブームにかけて生まれた女性が多く，1970 年代後半に消費者運動が盛んになったとき，人生上でも家事，出産，子育てを通じて「環境感性」が高い時期にあった。立木購入者の環境認識の主流は古典的な原生林保護の思想だったが，開発予定地の多くの地権者が，旧農用林の雑木林が照葉樹林へ遷移することを嫌うがゆえに開発を歓迎したことと乖離があった。立木購入者の一部は，1990 年代的な旧農用林の保全運動としても支持していた。

渡良瀬遊水池は，明治期の足尾鉱毒事件の対策として 1922 年に人工的に造成され，その後の数十年間にアシ原と野生動物からなる湿地生態系が成立した。やはりバブル景気下の 1988 年に観光開発が始まったため，自然保護団体が広域的に連合して保護運動を起こし，2002 年現在で継続中である。運動家らは，人為的に出現した生態系に新たな価値を見いだし，それを人為的に維持することを主張してきた。

香川県庁が 1994 年から実施している森林保全運動は，愛称を「どんぐり銀行」といい，行政主導型での新しい保全方法を提示している。森林保全を担っているのは中高年世代で，旧来のアカマツ林が枯死した後の，遷移途中相の落葉広葉樹林を維持しようとしている。この林地には，子供を含む一般市民が訪れて，グリーン・ツーリズムを楽しんでいる。

大野盆地，三芳村，渡良瀬遊水池，香川県の事例を通じて，その歴史的・社会運動的な性格と，保護運動の背景にある環境認識には関連があることがわかる。

大野盆地の地下水保全運動は，1970 年代に成立し主婦を主体とした点では当時の消費者運動の盛り上がりにも重なっていたが，高度経済成長期に顕著だった公害闘争の形式から脱却できず，運動の発展性も前向きの解決もなかった。大野では地下水が資源でも環境でもある両義性が原理的に拭いきれなかったが，その困難さは，地球温暖化防止のための二酸化炭素排出量削減がなかなか実行されない現在もなお続いているといえる。

三芳村のゴルフ場開発反対運動は，典型的に 1970 年代の消費者運動に基礎があり，かつバブル景気下の典型的な自然保護運動に発展した。しかし，関係者である地権者，消費者団体，有機農民，マ

スメディア，および立木購入者の間で，環境認識には相違が生じたし，公害闘争時からの反資本主義の基調をも遺していた。立木トラストという方法も，土地を買収するわけではないので，緊急発動的手段として認識された。これらの点で，三芳村の運動は 1990 年代初期の過渡的運動だったといえる。

渡良瀬遊水池の保全運動でも，運動家らは三芳村の事例と同じく 1970-80 年代の活動経歴を持っていた。しかし，それが多岐にわたっていたことが運動の視野を広め，生態系保全という学術的に明確な共通目標で結束した点は，現代的といえる。これは，世界的な湿地保全の動きや生物多様性の重視とも重なっていた。しかし，バブル景気下での開発反対運動を経験しなければならなかった点では，初期型とみなされる。渡良瀬遊水池の周辺住民は，湿地やアシ原を無用のもの，さらには子供が立ち入るのは危険な場所と認識してきた。運動家らは，その価値観の逆転をはからねばならなかった点でも，この運動は初期型とすべきである。

香川県の「どんぐり銀行」は，従来の闘争的な自然保護運動からは，かなりに断絶している。ただし，これに歴史的背景がないわけではなく，保全林地は自然への関心が高まった 1970 年代に買収されたし，保全作業者には中高年のボランティアが多い。環境認識の面では，雑木林に対する正の価値観がある程度普及していたので，これを所与のものとすることができた。

現在，原生自然に加えて，人間の管理下にある二次的自然をも尊重する思潮が強くなってきた。本論文で扱った事例を通じても，それは明確に認識されてきている。1990 年代には一般の人々も，生態学の植生遷移という一段高い動的レベルで自然を捉え，望ましい自然について議論ができるようになった。このことは，科学思想上，画期的な転換である。